

The Prime of Miss Jean Brodie に見る 教育・宗教・ポストモダニズム

有 為 楠 泉

1. はじめに

本稿は、Muriel Spark の小説 *The Prime of Miss Jean Brodie* (以下 *The Prime* と略記する) において展開される教育論および宗教観を、そのポストモダニズム的小説手法との関わりにおいて検討し、現代に通じる教育・社会的問題として考察する試みである。

スコットランドを舞台にしたこの小説は1961年に発表された。その中に登場する独身の女性教師 Miss Jean Brodie は、エディンバラの私立女子中等学校 Marcia Blaine School で特異な存在感を示し、生徒たちに途方もなく大きなインパクトを与える。設定されている時期は、1930年から第二次世界大戦直後までの約15年間。Spark 自身もエディンバラで生まれ、育ち、教育を受けた。しかも、1930年当時は Spark も11歳だったから、作品中で Miss Brodie に感化される少女たちと同時期同年齢においてということになる。従って自伝小説かと言えば、そうではない。この小説の中で、作家の自伝的要素を背景のいくつかの類似点の中から数えあげることではできても、それが本質的に重要とは思われない。Spark は常に自分の書くものは全て作り事であり、事実ではないことを強調していた。⁽¹⁾ また、概して作品は一人歩きし、作家の実生活を質的量的に凌駕するものである。*The Prime* が Spark 自身の成長といかに関連しているかはここでは論じない。しかし、この小説が単にひとりの特異な女性教師によって惹き起こされた波紋と騒動を描いた人間喜劇というだけではないことは明白である。

この小説の構成には特徴がある。ストーリーは直線的に展開せず、めまぐるしいほど頻繁に場面と時間が切り替わる。さらに、現実の場面はたびたび或る登場人物の空想世界につながり、空想癖のあるこの少女は、空想の世界の中でまだ見ぬ人物と自在に会話して読者を混乱させる。フラッシュ・バックによる映像の切り替えを多用する映画的技法が小説の文字空間に移し変え

られていると言ってもよいだろう。

しかし、そのめまぐるしい場面変化と時間の切り替えの向こうに緻密な時間の流れが透けて読める。40歳になった Miss Brodie は、担任したクラスの生徒たちに「一流中の一流」(“*crème de la crème*”)の教育方針を宣言する。そして、とりわけお気に入りの6人を選び出すと感化のための特異なやり方を推し進めていく。結果的には、反目する校長 Miss Mackay によって退職に追い込まれ、少女たちのひとりの裏切りに疑いを抱きつつ、56歳で亡くなる。一方、Miss Brodie に出会ったとき10歳か11歳だった少女たちは、二年後に高等部 (Senior) に進学し、彼女の担任生徒でなくなった後も、その強烈な影響力に一層惹きつけられていく。そして、Marcia Blaine School を卒業後、各々人生を選択し、40歳にさしかかった頃に、Miss Brodie の存在と自分たちへの影響力の何であったかを回顧するのである。読者はこの間の時間の経過を、様々な場面展開に見出される断片を繋ぎ合わせることによって、ほぼ正確に読み取ることができる。

ではなぜ Spark はこのような手法を用いたのか。この作品の手法とテーマの関わりは何なのか。そこから透けてたち現れるのは、教育の本質についての問題提起であり、また宗教がどのようにそれと関係するかについての考察と提言である。筆者は、この問題が、作品の書かれた時代背景と密接に関わっていると同時に、時代を超えて現代に通底する普遍的テーマであると考ええる。以下、この点を中心に、*The Prime* の特殊性と普遍性に検討を加える。

2. Miss Brodie の教育方針 (“prime”と“*crème de la crème*”)

Miss Brodie の教育理念は単純明快である。自己の人生の「最盛期」(“prime”)にさしかかった教師がそれまでの人生で得たあらゆる経験と知恵を生徒たちに伝えること、また、そうすることで生徒たちを「一流中の一流」(“*crème de la crème*”)に育てあげ、開花させることである。彼女は自分が今、人生の最盛期であることを強く自覚している。彼女の受けた教育、宗教、音楽、美術、恋愛体験、立ち居振舞い、日常生活のスタイル、基礎化粧品にいたるまで、あらゆるものが彼女の用いる教材であり、それに対する彼女の自信と執着は強い。40歳になろうとする Miss Brodie が今こそ人生の最盛期であると言う裏には、彼女及び彼女と同世代の女性のおかれた社会

状況が思い起こされる。1930年代にエディンバラに住む30歳以上の女性には、第一次大戦によって取り残された独身女性が少なくなかった。しかし、彼女らの中には、果敢に新しい考え方を見出し、芸術・教育・宗教・社会福祉の実践活動に精力的に関わっていく女性が大勢いた。Miss Brodie もそのひとりである。

(S)he was not out of place amongst her own kind, the vigorous daughters of dead or enfeebled merchants, of ministers of religion, University professors, doctors, big warehouse owners of the past, or the owners of fisheries who had endowed these daughters with shrewd wits, high-coloured cheeks, constitutions like horses, logical educations, hearty spirits and private means. (42)⁽²⁾

彼女らは、機知に富み、大柄で頑丈な体格をしており、論理的な教育を受け、情に厚く、それなりに財産もある元気娘たちであった。こういう女性たちは、エディンバラの町の店先で、店の主人と対等に、聖書談義から商品の品質保証のような経済問題に至るまで、いっばし議論するところをしばしば見かけられたりした。(42) せっせと勉強し、外国語を習い、外国旅行に出かけ、ギターを弾き、演劇活動を支援し、インテリア装飾のような流行を隣人たちに伝え、さらには「オックスフォード・グループによる道徳運動」(Oxford Group Movement)⁽³⁾に参加さえした。つまり、彼女たちは、自分のおかれた時代状況のハンディキャップを逆手にとって、健気にも元気に社会に打って出ようとするおしゃべりなフェミニストたちである。フェミニズム文学批評の古典とも目される *A Literature of Their Own: British Women Novelists from Brontë to Lessing* の著者 Elaine Showalter は、この時代における女性の社会的進出への意志と動きについて、この Miss Brodie を例にして「1930年代にはフェミニストはもうすでに滑稽なほど熱烈だとみなされるようになっていた」と述べている。⁽⁴⁾ ただ、この女性たちの中でも教職についたものはそれほど多くなく、Miss Brodie はその点でむしろ少数的存在であった。そして彼女の遭遇する困難もそこに根ざしていた。なぜなら、学校、それも特に Marcia Blaine School のような保守的な

私立女学校は、こういうタイプの女性に十分な理解を示さなかったからである。当然ながら、Miss Brodie の立場は、常に批判の目と冷遇にさらされていた。従って、Miss Brodie が40歳になる今、まさに自分の全盛期を自覚したのは、それまでの困難な状況をかろうじてくぐりぬけてきた自信と、不安の裏返しである喜びを表現しているように思われる。

そんな彼女の自信と経験が、担任クラスの、とりわけえり抜きの少女たちを魅了したことは大いに頷ける。窓辺に立って様々な事柄を語って聞かせる Miss Brodie の姿は、生徒たちの目にジャンヌ・ダルクのように凜々しく映る。(11)

Marcia Blaine School の教育はどんなものであったか。校長室の壁には、イギリス首相で保守党首の Baldwin の顔を描いたポスターが貼られており、それには「安全第一」のモットーが掲げられていた。イギリスは当時、三度政権を握ったこの首相のもとで、保護貿易を貫き、戦後処理の時期を通り越して、新産業（電機・自動車・化学）の急成長による奇妙な安定期に入りつつあった。⁽⁵⁾ 「安全第一」は国の施政方針であったと同時に地域の私立学校に伝播された教育方針でもあった。それに、そもそも、Marcia Blaine School は19世紀半ばに、エディンバラの裕福な製本屋の未亡人が創立した女学校である。創立者である彼女の肖像画の前には、常に書見台の上に聖書が置かれていて、徳高い婦人は宝石（ルビー）よりも高価であることを諭すページが開かれていた。創立記念日に肖像画に備えられる生花は、日保ちのよいダリアか菊と決められていた。いかにこの学校で安全・堅実・徳行が唱導されているかが測り知られる。

しかし、Miss Brodie はそうした校風に同調することなく、真・善・美の追求こそ最も重要なことと主張して憚らなかった。歴史の授業時間には、校長の見回りに備えて、生徒たちに教科書をカモフラージュ用に立てて持たせながら、彼女が最も大切と考える様々な人生の局面を語って聞かせた。大戦で失った彼女の6歳年下の恋人の話は、特に生徒たちの想像をかきたてた。詩の暗誦も大切だった。アーサー王と円卓の騎士、シャーロットの姫君が登場するキャメロット伝説を詠う詩の暗誦には、生徒たちの中でもとりわけ母音の発音の綺麗な、イングランド育ちの Sandy がいつも指名された。一流の女性となるための高貴な物腰のお手本には、実在の国民的大女優で“Dame”の称号を授与された Sybil Thorndike が引き合いに出された。献

身の大切さを教えるためには、芸術への献身で知られた当代屈指のバレリーナである Anna Pavrova が模範とされた。そして Miss Brodie は、世界的に有名となった Pavrova のバレエ「瀕死の白鳥」の上演を見せようと、生徒たちを連れ出した。Miss Brodie の言葉を借りれば、人生の重要な科目の順序は、「芸術—宗教—哲学—科学の順」(25)であった。

確かに型破り、独善的とも思われる教育メソッドである。しかし、彼女の教育論は根底のところ非常に重要な洞察力を備えており、知識伝授一辺倒の伝統的学校教育への鋭い批判の目を持ち、警鐘を鳴らすものである。Miss Brodie は教育 (“education”) について、校長である Miss Mackay の考えと比較しながら次のように述べる。

The word “education” comes from the root *e* from *ex*, out, and *duco*, I lead. It means a leading out. To me education is a leading out of what is already there in the pupil's soul. To Miss Mackay it is a putting in of something that is not there, and that is not what I call education. I call it intrusion, from the Latin root prefix *in* meaning in and the stem *trudo*, I thrust. Miss Mackay's method is to thrust a lot of information into the pupil's head; mine is a leading out of knowledge, and that is true education as is proved by the root meaning. (36)

つまり、「教育」を意味する “education” という言葉は、ラテン語の「～の外へ」を意味する *ex* の *e* と「私は導く」を意味する *duco* から来ており、教育の本質は生徒の精神の中にあるものを外へ導き出すことだと言うのである。ところが、校長 Miss Mackay のやり方は、もともと生徒の中にもないもの(知識)を押し込めようとするものであり、それは「～の中へ」を意味するラテン語の *in* と「私はつめ込む」を意味する *trudo* から成る “intrusion”, つまり「押し付け」と同じだと言うのである。内なるものの発掘か、知識の附与か、教育に対する二つの考え方をめぐる議論は、今日に至るまで「教育」の殆んど普遍的テーマと言ってよい。Miss Brodie がこのとき、語源に基づく意味論的な論陣を張って、「教育」に関する自説を展開しているのは興味深い。

Miss Brodie は、彼女の教育理論と方針を、まさに自分の最盛期に実践していくつもりであると誓っている。(36) 少なくとも選ばれた生徒たちと生徒たちの親の何人かはそういう Miss Brodie に感化され、賛同した。そして、彼女を追放しようと画策する校長に協力しようとはしなかった。

3. イギリスの中等教育と Marcia Blaine School

Marcia Blaine School の教育を、その背景となるイギリスの中等教育制度と照らし合わせて考えてみる。中等教育は、イギリスの教育制度史の中で常に重要なターニング・ポイントの役割を担ってきた。Marcia Blaine School はスコットランドのエディンバラにある。同じイギリスの中でもスコットランドとイングランドの中等教育制度は学年等で若干の違いが存在するが、基本的な理念と制度上の問題は共通する。本稿では、この制度上の問題点を中心に、この小説の提起する視点を検討する。

イギリスの中等教育は「イレブン・プラス」という言葉に象徴的に示される。それは元来11歳から12歳の学齢期を指す言葉だったが、中等・高等教育への進学を目指す子供たちにとっては、将来の運命が決定されてしまう時期をも意味していた。1940年代から1960年代にかけては中等教育制度のさらに大々的な整備が行われた。1944年に成立した教育法 (Butler's Act) では、義務教育修了年齢が15歳に引き上げられたが、子供たちは11歳のときの選抜試験 (この試験自体が「イレブン・プラス」と呼ばれるようになった) によって篩い分けられた後、高等教育 (大学) へ進学するためのグラマー・スクールと、それ以外の生徒のためのモダン・スクールに振り分けられることになった。しかし、この制度は始めから問題があった。「イレブン・プラス」の能力別篩い分けは、実質的には階級別篩い分けの色合いが強いという批判が多かったからである。その批判を踏まえてさらにコンプリヘンシブ・スクールの導入が決まり、中等教育の一本化がはかられた。1965年のことである。⁽⁶⁾

只、いずれにしろ、子供たちにとって11歳という年齢が重要な意味をもつことには変わりなかったといえる。この小説の Marcia Blaine School は私立校であり、生徒の多くはさらに高等教育に進むエリート女学校だった。この学校の生徒も、この学齢期に初等部 (Junior) から高等部 (Senior)

へ進級試験を受けて進学する。進学後は古典語を選択する者と現代語を選択する者に分かれる。そして、前者は高等教育進学系、後者はそうでない生徒というように受け取られていた。イギリス国民の殆んどが巻き込まれる中等教育制度の重要な位置付けと問題に、教師・生徒・親ともども Marcia Blaine School 全体が翻弄されている面があることは確かである。尤も、進学のためと限らずに、何事にも一流であることを説く Miss Brodie は、自分のえり抜きの生徒たちが古典語を選択することを無条件に考えていた。彼女の期待に応える如く、少女たちは、進学後、体操の得意な Eunice を除いて残り 5 人全員が古典語を選択する。Eunice も後になって古典語選択組になる。

ちなみに、イギリス中等教育における古典語の授業には、あるシンボリックの意味合いが存在する。グラマー・スクールとモダン・スクールの二本立ての制度の中でも、前者の中には、古典語が授業に取り入れられて、他との差異化を一層明確にするケースもあった。グラマー・スクールのなかでも、とりわけ歴史と伝統のあるパブリック・スクールにそれがあてはまる。そして、例えば Eton, Harrow, Winchester 等の有名パブリック・スクールは、高度な学問水準と同時に高い社会的ステータス、そして裕福な家柄の子弟を要する象徴的存在であった。時代を遡れば、これらの伝統的な中等教育機関の卒業者が、イギリスの階級社会の上層を形成し、体制を支配し続けてきたことは指摘するまでもない。

“Brodie Set” (Miss Brodie のお気に入りには周囲からこう呼ばれていた) の 6 人の少女は、進学して四つの寄宿舎に分散し、新しい授業を受け始める。しかし、その後も Miss Brodie の家に土曜日ごとに二人ずつ、お茶によばれて通うことになる。そして、Miss Brodie は、ギリシャ語を習い始めた少女たちから自分もそれを教わることにした。このとき彼女は、教育の実践に関してイギリス社会に存在した次のような風習を、少女たちに紹介する。「昔は子供を一人しか学校にやれない家族が多かったのです。そのかわりに、その子は一家の唯一の学者となって、昼間学校で学んだことを夜になると家族に教えたものです」。(81) Miss Brodie の考えの底には教え子を自分の家族のように見なす気持ちが潜んでいたのかもしれない。彼女は、“Brodie Set” の少女たちの新生活を自分も共有する決意であったし、彼女に教えることで、少女たちもギリシャ語をより明晰に記憶に留めることができる

う、という一石二鳥の発想が Miss Brodie には存在した。(82)

だが、このことは Miss Brodie が勉学に対して非常な勤勉精神を持ち合わせていたことを物語っている。それはさらに、次のような彼女の言動からも明らかにされる。彼女は、19世紀のイギリスを代表する経済学者且つ哲学者であった John Stuart Mill を引き合いに出し、彼が5歳にして毎朝、夜明けごろに起き出してギリシャ語を勉強したというエピソードを引用して、全盛期の自分にもやれないはずはないと言う。

“I have long wanted to know the Greek language, and this scheme will also serve to impress your knowledge on your own minds. John Stuart Mill used to rise at dawn to learn Greek at the age of five, and what John Stuart Mill could do as an infant at dawn, I too can do on a Saturday afternoon in my prime”. (81)

ギリシャ語を学ぼうとする Miss Brodie の動機は、中等教育における古典語の持つ社会的ステータスの象徴的意味合いとはやや異なっている。それは、やりたいことをやり、学びたいことを学ぶ近代的自由精神と、プロテスタント的勤勉精神 (Miss Brodie の宗教観については次章で検討する)、そして第一次大戦後の女性たちに大いに盛りあがったフェミニスト的行動力に関係しているように思われる点で興味深い。

4. スコットランド教会 (プロテスタント長老派) 対カトリシズム

Miss Brodie の人格と思想を考えると、もうひとつの鍵となるのは宗教である。スコットランドは16世紀に John Knox によってスコットランド教会 (the Church of Scotland) が設立されて以来、常に長老派 (プレスビテリアン) が支配するプロテスタントの土地であった。エディンバラの街には、神の絶対意志によって選ばれた一部の者は救われ、残りの者は滅びる運命にあるとするカルヴィン主義的予定説を信奉する厚い宗教的空氣が存在した。従ってその空氣の中で育った Miss Brodie も、若い頃から厳格な長老派プロテスタントであり、安息日を守る習慣をしっかりと持ち合わせて

いる。しかし、彼女は大学の夜間講座で比較宗教学を聴講して、近頃は必ずしもカルヴィニズムを絶対視することはなくなっていた。“Brodie Set”の少女たちは、それについて一切を彼女から聞かされて、正直な人間にも神を信じないものがあることを始めて知らされる。只、Miss Brodie は福音書だけはまじめに学ぶように生徒たちに強制していた。福音書には「真理」と「善」についての教えがあり、また音読したときの「美しさ」が彼女の真・善・美の教育理念と一致したせいだと思われる。(36)

彼女は日曜の教会行きを欠かさないが、カトリック以外ならどんな教会にも出かけていった。厳密な長老派のスコットランド教会以外にも、国教会やそれに近い主流派（エピスコパリアン）教会、非国教会派自由教会、さらにはメソジスト教会まで。唯一カトリック教会に近付かなかったのは、それが迷信に支配された教会だとの考えからであった。Miss Brodie は自分の信仰に疑問を抱かずに、神が自分のそばに存在すると考えている。その意味では徹底したカルヴィニストと言えるかもしれない。彼女が本当は美術教師の Mr Lloyd を好きなのに、音楽教師の Mr Lowther の家で、しばらくの期間、週末ごとに彼とベッドを共にすることに全く躊躇を覚えないのも、神に選ばれた者という確信の結果と思われる。

しかし、このことはストーリーの展開に重要な意味を帯びる。Mr Lloyd はカトリック教徒であり、家族もあるので、Miss Brodie は彼と実際の関係を持たずに、彼の芸術のミューズ神であることに満足しようとする。しかし、Mr Lloyd が描く肖像画の人物には、みな Miss Brodie の面影がダブって現れる。実際 Mr Lloyd にとって、Miss Brodie は非常に刺激的で魅力的なミューズ神だったからである。

この経緯が少女たちに及ぼす影響は大きい。Sandy の受けた刺激は特別で、それが Miss Brodie 自身に大波となって跳ね返ることになる。Sandy は聡明さと洞察力のゆえに Miss Brodie から信頼され、また最も深く Miss Brodie と関わりを持つ生徒である。彼女は特に小さな目が特徴的とされており、その目は異端審問官のそれのように受け取れる。Sandy は、Miss Brodie の行動を常に見張る監視人でもある。Sandy は、Mr Lloyd の描く生徒たちや家族の肖像画に Miss Brodie の面影が秘められていることに気付き、その背後にある二人の関係を見抜いて、Miss Brodie の決定的な過ちを見出す。Miss Brodie が自分をミューズ神のように思い込み、また自

分が神 (Province) の如く Mr Lloyd や少女たちの関係を動かしていると考え「思い上がり」の罪を犯しているということだ。その結果, Sandy にとって, Miss Brodie はもはやそれまでの絶対的な存在ではなくなる。18 歳になっていた Sandy は Mr Lloyd を挑発して関係を持ち, 「Miss Brodie が一番予想しそうでない」事態を作り出す。しかし, Sandy の Mr Lloyd への関心はすぐに失せて, 彼のような清濁併せ持つ人間をも呑み込むカトリシズムそのものに強い関心を抱く。結局, 彼女自身がカトリックに改宗する。Sandy の改宗は, やや唐突な感じがするのを否めないが, カトリシズムの持つ非理性的な何か彼女を惹きつけて離さない。8 年後, 彼女は尼僧となって修道院に入る。その時, 彼女は既に『平凡の変容』(“The Transfiguration of the Commonplace”) と題した心理学の書物を出して, 世間の注目を浴びていた。大学で心理学を専攻した彼女にとって, 改宗という自己の変容のプロセスも, まさに格好の分析対象だったのではないかと考えられる。

Sandy はかつて11歳の頃, Miss Brodie に連れられてエディンバラの町を見学したことがある。このとき, 城と刑務所とスラムの喧騒というこの町の光と影によって, 言うに言われぬ恐怖を体験した Sandy は, おとなになって再度同じ道を一人で歩き回り, そこに充満するカルヴィニズムの空気が Miss Brodie という人間性を作り出したことを確信する。(109) カルヴィニズムを否定してカトリックに改宗することは, Miss Brodie を否定することに他ならない。だが, Miss Brodie の影響なくして Sandy の改宗もありえない。修道院に入り, Sister Helena と呼ばれるようになった Sandy は, もう還俗することを許されないが, 訪問者の一人に「何があなたに一番影響を与えたか」と尋ねられたとき, 彼女は「Miss Brodie という人がいたのです。全盛期のね。」と答えている。(128) Sandy の成長にともない, 彼女と Miss Brodie の存在のエネルギーの強さは, 砂時計の砂のように入れ替わる。様々な局面において, 教育と宗教が相拮抗しながら, 個々の人間の生涯に影響を及ぼしていく様子が垣間見られると言ってよいだろう。

ちなみに, 作者 Spark 自身, プロテスタントからカトリックに改宗した経歴の持ち主である。批評家 Ruth Whittaker は, Spark の改宗について次のように述べている。

Newman's writings were a very important influence on her (Spark's) decision to become a Roman Catholic. She admired the clarity of his style, and the thoroughness with which he had considered his own conversion. For her, as for Newman, Catholicism was not something which required strenuous intellectual adaptation; for both of them it seems to have been the religion with which their beliefs instinctively accorded, and it was the authenticity of this instinctive attraction both had to test, rather than the Church's dogma itself.⁽⁷⁾

ここに言及のある (John Henry) Newman は、イギリスの神学者かつ文人である。初め英国教会に属し、1830年代からオックスフォード大学で、Keble や Pusey とともに、英国教会にカトリック教義を復興させようとする所謂「オックスフォード運動」(Oxford Movement) を唱導したことで知られる。後にカトリックに改宗し、枢機脚になった。Whittaker は、Spark が Newman に共鳴する要素として、その本能的直観的な調和の精神を指摘しているのである。The Prime の中で、Sandy がカトリックに改宗するのもそれに通じるところがある。単に宗教の教義としてというよりも、精神・社会・教育の全てに関連する存在論的問いかけと応答が背景にあるというべきであろう。

5. ポストモダニズム

最後に、この小説に見られるポストモダニズム的手法について、これまで見てきた教育と宗教のテーマとの関係から考えてみる。

この小説は全体がフラッシュ・バックの連続で構成され、時間の連続性が各所で断ち切られる。人物の意識から意識へ、現実から空想へ、会話から黙想へ、モノローグから集団のおしゃべりへ、あるいはその逆へ。また空想の中で少女たちが作り上げた架空の物語である『高き山の砦』や実在小説『誘拐』⁽⁸⁾ の数場面が入れ子細工のように重層的に挿入される。その間に、Miss Brodie が少女たちに語り聞かせる種々様々な芸術品・人物・歴史・エディンバラの風物・日常品の話が織り込まれて、*The Prime* はあたかも「事物

と情報のオン・パレード」の様相すら呈している。そういった特質から、この小説に、いわゆる連続性・進歩性・科学的真理・理性の追究といった近代の合理主義を飛び越えた、ポストモダンの要素を感じ取るのは、筆者だけであろうか。

ポストモダニズムの萌芽をこの小説にあてはめるのには異論があるかもしれない。一つには、ポストモダニズムを、1970年代以降の資本主義文明の構造転換を伴う文化現象の脈絡で捉える見方が、ある意味で一般的だからである。例えば、David Harvey や Jim McGuigan の見方はそれにあてはまる。⁽⁹⁾ しかし、20世紀初め、特に1920年代に芸術の諸領域で展開された種々の実験的スタイルが「モダニズム」と呼ばれるのに対して、それとは異なる現実感覚を有した新しい感性にポストモダンの語をあてはめることは可能である。例えば、Whittaker も、Spark の小説について次のような指摘をする。

Her novels have an ethical and a realistic bias, but of a strange kind. They also have a feel of moral obliquity and a distinctly contemporary hardness; indeed, they have a sharp stylistic authenticity brought about through techniques which are peculiarly *post-modern*⁽¹⁰⁾. (イタリック筆者)

小説のポストモダニズム的要素を考察するのに、Terry Eagleton の言葉を借用してみよう。彼によれば、ポストモダニズムの特性は「恣意的で折衷的でハイブリッドで脱中心的で流動的で不連続のパスティーシュじみたもの」⁽¹¹⁾ であるが、この要素を *The Prime* のフィクションとしての構成の中に見出すことは困難ではない。Miss Brodie の世界は“*crème de la crème*”を目標に掲げているが、基本的にこのパスティーシュの世界である。パスティーシュとは「ごたまぜ・切り貼り」を意味し、文学・美術・音楽の分野での混成・模倣作品を指すのにも用いられる。Miss Brodie の教材がありとあらゆるもの・人物・知識の寄せ集めで成り立っていることがここで思い出される。そして、作者 Spark は、Miss Brodie のパスティーシュ的世界の持つ新しい魅力とヴァイタリティと根底にある途方もない過ち（思い違い）を、フラッシュ・バックで鮮やかに浮かび上がらせた。

Miss Brodie は彼女の教育観に沿って、6人の少女たちに語りかけ、仕込み、彼女らの潜在的特性を引き出していく。生徒たちは、より個性的で強い自我を備えた人間に育ち、それぞれの道を選択していく。彼女らは全盛期のMiss Brodieに出会い、彼女のバスターシユな世界を経験することで、自分達もまた個性の寄り集まったバスターシユな世界を作り上げていっている。ポストモダニズムの有する自由と恣意性、及びその裏返しでもある流動性・破壊性が、Miss Brodie自身を始め、少女たちの啓発と行動力の下支えとなっていると思われる点は指摘しておく必要がある。

本稿の始めにも述べたように、Miss Brodieのような、豊富な知識とヴァイタリティと厚い情を基にして世の中に果敢に出かけていったフェミニストの女性たちは、時代の落とし子であった。彼女らは、保守を堅持しようとする社会にあっても、必然的に台頭する存在であったと言えるだろう。Miss Brodieが休暇にイタリアやエジプトを旅行し、ロンドンに立ち寄り、またドイツに出かけているのは、彼女の貪欲な活動意欲の故であろうし、イタリアやドイツで見たファシスト党員の規律を生徒たちに聞かせるのも、元々は彼女の教材の一つという認識から出発したものであろう。

しかし、神に選ばれたものという根本的な過ちをMiss Brodieの意識のなかに見出したSandyは、校長のMiss MackeyからMiss Brodieに関するマイナス情報を求められたとき、「Miss Brodieは生まれながらのファシストです」(125)と答えてしまう。Miss Brodieはそれを理由に失職させられる。そしてSandyの裏切りによるものかどうか確信を持たないまま、失意のうちに死ぬ。Miss Brodieにとっては、自分が生徒(Sandy)の内奥から引き出したもの(洞察力)によって自ら裁かれるという皮肉な逆転現象であったと言わざるを得ない。

Miss Brodieの教育は、結果的にはあまり成功したとは言えないかもしれない。しかし、彼女は自分の人生の全てを教育に委ね、自分の世界を呈示しながら全盛期を駆け抜けた。Miss Brodieと、生徒たちの中でもとりわけSandyの、互いに対する影響力および生存のエネルギーの強さは、砂時計の砂のように入れ替わる。だが、作者Sparkはそのどちらかに味方するというのではなく、人物たちの生のプロセスを、教育と宗教の側面から、自身は一步引いた冷静な目で描ききった。

Sparkは小説家として、批評家Frank Kermodeのインタビューに答え

て次のように語っている。

I don't claim that my novels are truth — I claim that they are fiction, out of which a kind of truth emerges. And I keep in my mind specifically that what I am writing is fiction because I am interested in truth — absolute truth — and I don't pretend that what I'm writing is more than an imaginative extension of the truth — something inventive.⁽¹²⁾

I think that the novelist is out just to say what happened. I express it in the past tense, but in the actual process, as far as I am concerned, it happens in the present tense. Things just happen and one records what has happened a few seconds later.... I do know events occur in my mind, and I record them.⁽¹³⁾

要約すれば、Spark は、自分の作品が、完全に彼女の頭の中で起こったものの記録であり、しかもそこにはある種の絶対的の真実が生まれている、と言っているのだ。*The Prime* についても、同様の確信を作者のなかに感じることができる。それはポストモダニズム的小説空間で展開された、教育の本質に関する議論であり、人間の絶対的の真実を提供しようとするものであった。教育の普遍的テーマを、フィクションの大胆な手法で展開する作者の手さばきに、読者は魅了されると同時に、そこに潜み、現代に通底する諸問題に、真摯に対峙させられずにはいられない。

注

- (1) Frank Kermode, 'The House of Fiction: Interviews with Seven Novelists', in M. Bradbury (ed.), *The Novel Today* (Glasgow: Collins, 1977), 133-135.
- (2) Muriel Spark, *The Prime of Miss Jean Brodie* (1961) (London: Penguin Books, 1965). 尚、本文中、この作品からの引用は全てこの版を用いる。引用

ページは文中の（ ）内の数字で示す。

- (3) 1921年頃、アメリカ人 F. Buchman がイギリスの Oxford を中心に唱導した宗教運動で、公私生活における絶対道徳性を強調したことで知られる。
- (4) Elaine Showalter, *A Literature of Their Own: British Women Novelists from Brontë to Lessing* (Princeton: Princeton University Press, 1977). ショウォールター『女性自身の文学 ブロンテからレッシングまで』（川本静子・岡村直美・鷺見八重子・窪田憲子共訳、みすず書房、1993）273-274.
- (5) 村岡健次・川北稔編著『イギリス近代史』（ミネルヴァ書房、1986）237-258.
- (6) 中等教育制度については、上掲書『イギリス近代史』の他、*Longman Dictionary of English Language and Culture* (Harlow: Addison Wesley Longman, 1998), 橋本伸也・他『近代ヨーロッパの探求④ エリート教育』（ミネルヴァ書房、2001）、築田憲之・橋本尚江編著『イギリス文化への招待』（北星堂書店、1998）などを参考にした。
- (7) Ruth Whittaker, "Angels Dining at the Ritz': The Faith and Fiction of Muriel Spark" in M. Bradbury & D. Palmer (eds.), *The Contemporary English Novel* (London: Edward Arnold, 1979), 161.
- (8) Robert Louis Stevenson の小説 *Kidnapped* (1886) のこと。
- (9) David Harvey, *The Condition of Postmodernity* (Oxford: Blackwell, 1989). Jim McGuigan, *Modernity and Postmodern Culture* (London: Open University Press, 1999).
- (10) Whittaker, 158.
- (11) Terry Eagleton, *Literary Theory: An Introduction*, Second Edition (Oxford: Blackwell, 1996).
- (12) Kermode, 133.
- (13) Kermode, 134.